白井さんの主な経歴

1999 年	「第３回愛と夢の童話コンテスト」奨励賞受賞（主催・アイエヌジー生命保険（現エヌエヌ生命保険））
2005 年	講談社Ｆ文庫より『真夏の風船』＊でデビュー。
2006 年	同『ラ・ヴ』＊刊行。
2007 年～ 2008 年	電子書籍「暦がつむぐ恋物語」シリーズ＊（モバイルメディアリサーチ）を連載出版。全 12 作品の短編小説。
2011 年～ 2015 年	集英社みらい文庫より、ノベライズ『君に届け』シリーズ全 13 巻を出版。
2011 年	ＴＢＳ・講談社「第３回　ドラマ原作大賞」最終選考に残る。
2014 年	主婦の友社すこし不思議文庫より『Starlet』＊出版。
2014 年	集英社みらい文庫より『アオハライド　映画ノベライズ』出版。
2015 年	「ソングノベルズ大賞」佳作受賞（株式会社エムオン・エンタテインメント / 株式会社ブックリスタ主催）。 受賞作『青の障壁』を電子書籍で配信。DREAMS COME TRUE の楽曲「朝がまた来る」をテーマに紡いだ長編小説。
2017 年	小説家になろう×ポプラ社「恋＆謎解き学園ショートストーリーコンテスト」での「胸キュン賞」受賞作 「雨降りの午後」がアンソロジー『ほんとはずっと好きだった』（ポプラ社）に収録。
2021 年	小学館ジュニア文庫より『小説　映画ドラえもん　のび太の南極カチコチ大冒険』出版。
2022 年	小学館ジュニア文庫より『小説　映画ドラえもん　のび太と奇跡の島』出版。
2022 年	ポプラ社ポプラ文庫ピュアフルより『花屋カフェ Lune のスペシャリテ』出版。

＊印は現在、書店での取り扱いはありません

「愛と夢の童話コンテスト」受賞作収録の書籍と電子書籍以外は利根町図書館で借りられます

作家を目指したきっかけを教えてください

目指したというよりも、書くことが好きで、公募を見つけるとにかく一等賞を取りたい一心で書いて。そうするうちに幸運なことに、本を出せるようになりました。自分にできないことを引いていって、唯一残ったのが書くことだったので、しがみついたんですよね。

作家になるまでの道のりを教えてください

中学生くらいのころから、いつか物語を書きたいなあと思いつつ、あらすじを考えることしかしていませんでした。それが大学の卒論で、１００枚近い論文を書いたことで、文章を書くということに自信がつきました。でも会社に勤めるようになって、今度は忙しくて書けない。

布川臨時大祭がきっかけで生まれた物語が掲載された絵本。白井さんが作家を目指す大きなきっかけとなった（書店・図書館での取り扱いなし）

そんな中、夏のある休日、布川神社の臨時大祭の山車（だし）を引く声が聞こえてきたんです。まだ寝ているときに。そしたら頭の中で、小学生の男の子が夏祭りの日に、お獅子（しし）と話す声が聞こえてきて。その会話を枕元に置いていたネタ帳に書きなぐった後、それを基に初めてまとめた童話が、企業のコンテストで入賞して。アンソロジーの非売品の１冊の本になりました。全国の児童養護施設に寄贈されたそうです。デビューにはつながらなかったのですが、ああ、私、書いてもいいんだなって思いました。それから今度は、大人向けの恋愛小説を書いてみてって、ある方に言われて、初めて書いて公募にチャレンジして…落選したんですが、編集さんに「今度新しく女性向けのレーベルができるから、書き直してチャレンジしてみませんか？」と声をかけていただいて、それで『真夏の風船』でデビューしました。

利根町で思い入れがあるのは田んぼと利根川の風景だという白井さん。この写真はお父さまが撮影したもの

1. 幼い頃から見てきた利根町の灯籠流しや花火大会の光景が作品の中で描かれる事も　2. ノートパソコンのイヤホンジャックに住む「けろっぱち」は良き相棒　3. 思い出の場所の一つ、旧布川小の校庭の桜の木

ノベライズとは？

映画や漫画など、小説以外の作品を小説の手法で表現すること

朗読のライブをされていたとか？

柏のジャズバーでマスターの出すテーマを元に、２カ月に一度、短編小説を書き下ろし、ミュージシャンの即興演奏とともに作者自ら朗読するライブを７年間開催しました。柏のワインバーでは、画家の描いた１枚の絵画からインスパイアされた物語を書き下ろし、役者が朗読するといったライブを行い、他にもご縁があって朗読のライブをいくつか…テーマをいただくことで、新しい視点で物語を書けましたね。あと、朗読劇に原作を提供したこともあります。

物語を書く上で、難しいところや楽しいところは？

キャラクターが頭の中で会話を始めて、動き出して、それを追いかけるようにキーボードに打ち込んでいくのはとても楽しいですね。難しいのはキャラクターが動いてくれないとき。そんなときは動いてくれるまで、ほかのことをします。エンタメに触れて引き出しを増やすとか。

小説は「行間を読む」なんて言いますが、漫画のノベライズの時には、漫画のコマとコマの間まで考えて書いていました。でも、細かく書き過ぎでもダメで。私は細かく描写しすぎて、編集さんに削られることもあります。

ドラえもんの『南極カチコチ大冒険』は、想像の世界での物語なので、風景描写が特に苦労しました。映画の中の空想の建物やそこでのシーンを、文字だけで表現するのは本当に大変で。何度ＤＶＤの一時停止を押したか。ビデオテープなら切れていました（笑）

これまで読んできた本の中で、人生で一番の本を選ぶとしたら何を選びますか？

アーシュラ・Ｋ・ル＝グウィンの『ゲド戦記』も大好きですが、パウロ・コエーリョの『アルケミスト』もとても好きです。哲学的で、異国の旅人になったような気になれて、チャレンジ精神がこう、フツフツと。何かの節目の時に読むと良いと思うし、何度も読み返したい本です。

利根町で思い出の場所を教えてください

布川神社のそばの、旧布川小学校の校庭です。あの桜たちが好きです。祖父が当時の布川中学校のＰＴＡ会長だった時に、生徒たちと植えたと聞いているので、樹齢70年以上ですね。

桜の花の季節には必ず見に行きます。いったいこの桜は、どれだけのドラマを見守ってきたのかと思うと、胸に迫るものがあります。

蛟蜊神社も小さなころから毎年初詣に行く、特別な場所です。例大祭「ばかまち」も、何度か見ています。夜に行われる厳かな神事、ホントは内緒にしておきたいけれど、一見の価値ありです。

今後の展望について教えてください

童話もデビュー作も、昨年出版した『花屋カフェ Lune（リュンヌ） のスペシャリテ』も、私が書くための芯となっている「日本がかつて戦争をしていた」という事実を忘れないで、悲惨な記憶だけどちゃんと次の世代へ繋げて過ちを繰り返さない、そんな思いを詰め込みました。

今、出版に向けて準備中の児童書も、まさにそういった思いを込めているんですが、実際に遠くて近い国で戦争が起きていて。日本の子どもたちもその戦争や、他にもミサイルの飛来にもちろん恐怖を感じていますが、だからといって、過去のことを知らなくていいわけではなくて。その辺り、いたずらに怖がらせたくないな、でも伝えたいなって、バランスを考えて模索しながら書いています。

私は書くことで癒されています。書き出すことで心の中が整理されて、デトックスできるという面もあるんですよね。なので、たとえ誰かに届かないとしても、私はずっと何かを書き続けるんだと思います。

利根町の豊かな自然や、伝統的な行事の風景からインスピレーションを受けて生み出される作品の数々。白井さんは自身の作品を通して、大切なことを次の世代に伝え、繋ぎ続けていきます。